台大日本語文研究第 50 期
2025 年 12 月，頁 29-46
2025-09-22 收稿，2025-11-20 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.202512_(50).0002

《神隱少女》試論
—利基於〈火之飯〉與〈共食信仰〉的敘事結構—

何資宜*

摘要

《神隱少女》在先行研究中經常被提及具有「純淨古樸的日本風」「融合古今的日本現代神話」「日本之心」等，充滿〈日本風〉的元素與表現，深受世界各地劇迷的喜愛。但另一方面，海外學者屢屢提及之“Japaneseness（日本性）”究竟是如何被巧妙地交織於作品之中？海外觀眾又是如何認知理解這些難解的日本風呢？這些謎團至今仍懸而未解。

基於前述脈絡基礎，本研究著眼於角色造型與台詞對話，並以宮崎駿導演的分鏡註記為主要線索，解析此作品所設定之世界觀（＝湯屋的「規則」）與古代日本文化之間的關聯。研究結果顯示，對非日本觀眾而言難以解解的〈日本性〉，實則與神話時代延續至今的古代信仰與社會結構密不可分—包括〈黃泉戶喫〉、〈共食制度〉、〈氏族制度〉等概念。因此，本研究主張，《神隱少女》可作為促進海外觀眾理解深層日本文化之重要媒介。

關鍵詞：神隱少女、黃泉戶喫、共食信仰、氏族制度、
酷日本戰略（Cool Japan）

* 國立高雄大學東亞語文學系副教授

臺灣大學學術期刊資料庫

An Essay on *Spirited Away*: Narrative Structure Sustained by Hi no Meshi and Commensal Beliefs

Tzu-Yi Ho*

Abstract

The global acclaim of *Spirited Away* (2001), discussed in this paper, is frequently ascribed to its embodiment of "something Japanese"—elements often described as "pristine, traditional Japaneseness," "a hybrid modern Japanese myth," or "the heart of Japan." Yet, despite such discourse by international scholars, the specific mechanisms by which this "Japaneseness" is embedded within the film, and the manner in which its represented elements are cognitively processed, remain insufficiently articulated.

Building on this context, this paper explores the connection between the film's worldview (the "rules" of the bathhouse) and ancient Japanese culture, utilizing Director Miyazaki's storyboard annotations as primary clues alongside character construction and dialogue. The findings elucidate that the "something Japanese" considered difficult for non-Japanese audiences to grasp is inextricably linked to ancient beliefs and social structures transmitted from the mythical age—namely, *Yomotsuhegui*, Commensal Beliefs, and the clan system. Thus, this study posits that the film serves as a significant medium for facilitating a more profound comprehension of Japanese culture.

Key words: *Spirited Away*, *yomotsuheguri*, Commensal Beliefs, clan system, Cool Japan Strategy

* Associate Professor in Department of East Asian Languages and Literature, National University of Kaohsiung

臺灣人文學術期刊資料庫

『千と千尋の神隠し』試論
—〈火の飯〉や〈共食信仰〉に支えられた物語構造—

何資宜*

要旨

本稿で取り上げた『千と千尋の神隠し』(2001)が、世界中で大ヒットとなった理由として、「清らかな古き良き日本性」「ハイブリッドな日本の現代神話」「日本の心」といった〈日本的な何か〉を思わせる要素や表現であると指摘されている。一方で、海外の研究者らが言及したこれら「'Japaneseness'(日本らしさ)」とは、いかに作品に盛り込まれて、そこに表象された要素をどのように認知されているのかは、いまだ明確に示されてはいないままである。

こうした点を踏まえ、本稿は、キャラクターの造形や登場人物が交わすセリフのみならず、宮崎監督による絵コンテへの注記などを手掛かりに、この物語における世界観(＝湯屋での「きまり」)と古代日本の文化的側面との関連性の追求を試みた。その結果、外国人にとって難解なものとされる〈日本的な何か〉とは、神話の時代から存在し、伝承された〈黄泉戸喫〉〈共食制度〉〈氏族制度〉といった、古代日本の信仰や社会的構造と深く関わっていることが明らかとなり、より深く日本を知る上での一つの可能性が示されたものと考えられる。

キーワード：千と千尋の神隠し、黄泉戸喫、共食信仰、氏族制度、
クールジャパン戦略

* 国立高雄大学東亜語文学系副教授

臺灣大學學術期刊資料庫

『千と千尋の神隠し』試論
―〈火の飯〉や〈共食信仰〉に支えられた物語構造―

何資宜

一、はじめに

宮崎アニメ『千と千尋の神隠し』(2001)は、2002年ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞したのを皮切りに、2003年米アカデミーでの長編アニメ賞などの数々の栄冠に輝き、世界的な話題となった作品である。

なお、世界中で大ヒットとなった理由として、「現代日本を象徴しつつ清らかな古き良き日本性を再構築して観客に提示している[1]」「グローバルな文化を取り入れながら日本古来の神道や神話を変換し復活させ、新しい「ハイブリッドな日本の現代神話」を作り上げている[2]」「そういった意味でこの作品は「日本の心」というものを具現化しているのであ[3]」るなど、既に多く論じられてきた。

そして、これらの言説を概観すれば、その根底に共通するキーワードとして、「清らかな古き良き日本性」(Napier)、「ハイブリッドな日本の現代神話」(Wright)、「日本の心」(Yoshioka)といったものが浮かび上がろう。つまり〈日本的な何か〉をイメージさせるものである。

確かに、この作品をその冒頭からみれば「石祠」や「鳥居」をはじめ、奇妙な石像や(春日様の)お面などが現れ、「懐かしき古き日本」のイメージがふんだんに登場している。ただ、一方では、同作

---

1 Napier, Susan J. “Matter out of Place: Carnival, Containment, and Cultural Recovery in Miyazaki’s Spirited Away.” Journal of Japanese Studies 32.2(2006): 287-310. Print.

2 Wright, Lucy. “Forest Spirits, Giant Insects and World Trees: THe Nature Vision of Hayao Miyazaki.” *Journal of Religion and Popular Culture 10*(2005): no. pag. Print.

3 Yoshioka, Shiro. “Heart of Japaneseness: History and Nostalgia in Hayao Miyazaki’s Spirited Away.” Japanese Visual Culture: Explorations in the World of Manga and Anime. Ed. MacWilliams, Mark W. Armonk: M. E. Sharpe, 2008. 56-73. Print.

臺灣大學學術期刊資料庫

に込められたこうしたモチーフが、海外の観客にどの程度、もしくはどのように理解されたかは不明で、緻密に織り込まれた細部の分かりにくさも海外の研究者に繰り返し指摘されている[4]。そして、この物語の海外進出に際して立ちふさがった問題として、田中美保子（2018）は、「タイム・ファンタジーとしての特異さや、得体のしれない異国的な登場者たち（中略）とくに神々や妖怪の名前や「神々」という語の英訳[5]」といった壁の存在を指摘している。

確かに、「宗教や習俗に関わる語句はもともと翻訳が非常に困難である[6]」ことは、十分に理解できよう。ただ、こうした障壁を乗り越え、同作が広く海外で認知、評価された上で、海外研究者らが幾度となく言及した「日本の心」「古き良き日本の姿」「'Japaneseness'（日本らしさ）」といったものは、果たしていかに表現され、人々にどのように受け止められたのかは、いまだに明かされていないままだと論者は考えるものである。

こうした点を踏まえ、本稿は、「東アジアの外れの土人の国[7]」を舞台としたこの物語を、キャラクターの造形や登場人物が交わすセリフ、そして、宮崎監督による絵コンテの注記などを手掛かりに改めて見つめ、そこに織り込まれた難解で分かりにくい〈日本的な何か〉の内実を探り、そこに込められたこの物語における世界観（＝

---

4 Denison, Rayna. “Star-Spangled Ghibli: Star Voices in the American Version of Hayao Miyazaki’s Films.”in *Animation:An Interdisciplilnary Journal*. 2008. Vol.3(2):129-146.
Foster, Michael Dylan. “Yokai Culture.” in *Pandemonium and Parade*. University of California Pres, 2008.pp.212.
Thomas,Jolyon Baraka. “Enteraining Religious Ideas.”in *Drawing on Tradion:Manga, Anime, And Religion on Contemporary Japan*. University of Hawaii Press, 2012.pp.103

5 田中美保子（2018）「宮崎駿『千と千尋の神隠し』のアメリカにおける受容―日本の神々・妖怪たち」『東京女子大学比較文化研究所紀要 79』、59-60 頁。

6 前掲田中美保子（2018）、61 頁。

7 「だからこの『千と千尋』は、極めて地域的な―ぼくは”東アジアの外れの土人の国”と呼んでいますが、儒教に教化されきらなかった、土俗のもっと古い神事ですね―神事にいっぱいいろんなものを残している国の作品だと思うとよく分かるのです。」宮崎駿（2002.1.11）「しんどいけれどこんなに面白い時代はない―筑紫哲也氏との対談」『週刊金曜日』二〇〇二年一月十一日号、ただし引用は宮崎駿『折り返し点 1997～2008』岩波書店、2008.7、278 頁による。

臺灣大學學術期刊論文庫

「銭：この世界のきまり」（1255 カット））と古代日本との関連性を探求するものである。なお、本稿での考察は、次の凡例に従って行うものとした。

〔凡例〕

① 同作の事例および引用は『スタジオジブリ絵コンテ全集 13 千と千尋の神隠し』（徳間書店、2022.2、9 刷発行）による。

② 引用表示はアラビア数字でカット数を示す。なお、引用に関してセリフと注記とが明確となるように、前者を「　」、後者を｛　｝で示す。例として次のようなものとなる。

（例）「ち:ハタラカセテクダサイ」｛なおもがんばるちひろ。こうなるとけっこうしぶとい大口をあけるが声をひそめて一語一語はっきりと｝（455 カット）

上記の例は、「　」内は千尋のセリフ、｛　｝は宮崎監督による注記、絵コンテの 455 カットをそれぞれ示す。なお、引用箇所は改行を表示せず、また、文章の読みやすさを考慮し、原文に句読点がない場合でも、筆者により適宜に付した。

二、〈黄泉戸喫（ヨモツヘグヒ）〉と「カマジイ」

千尋一家が迷い込んだ湯屋には、実に奇妙な「きまり」が数多くある。例えば、「少年：この世界のものを食べないとそなたは消えてしまう」（179 カット。下線は論者による追記、以下同じ。）や「ハク：この世界では仕事を持たないものは、湯バーバに動物にされてしまう。」（243 カット）などである。そして、物語におけるこうした「この世界のきまり」（1255 カット）は、いずれも「古風な服装」を着た謎の少年・ハクによって告げられる。だが、「この世界のものを食べないと、そなたは消えてしまう」という「きまり」があったにも関わらず、千尋の両親がそうした異界のものを食べて豚になったのはなぜだろう。

ここでは、こうした疑問を念頭に、この物語における冒頭のシーンから概観したい。車に乗った千尋一家が道に迷って入った交差点

臺灣大學學術期刊資料庫

には大きな木があり、その下には「鳥居」や「石祠」がある。周知のように、「敷地に垣や鳥居が設けられ、神聖な結界として外界と遮断されている[8]」というように、「鳥居」は、人間が住む世界である現世と神域との端境を示すもので、「結界」としての役割を果たしている。また、道端に何度も現れた「石祠」や「石像」は、いわゆる「庚申塔」や「道祖神」の表象として、そのいずれも「村や里を疫病などの悪いものから守るための結界」を暗示させる。そして、「こうした民間信仰は、日本独特の自然信仰（アニミズム）や多神教をベースにしている[9]」と言われている。いわば、大きな木の下に置かれた「鳥居」や「石祠」、道端に何度も顔を出した「石像」、さらにトンネルの入り口の｛中央に車止の石人｝（37 カット）があったのも、そのいずれも「ゆ：ここはね　人間の来るところじゃないんだ」（432 カット）といった意図を暗に示すものであろう。つまり、千尋一家の侵入を拒む兆しなのである。しかしながら、千尋一家は、これらの警告に気付くことなく、もしくは無視し、父親の独断で不思議な異界へ突入したのである。

なお、「上代の日本人は、「死者の国に赴いてそこの食物を口にしたならば最早や現し世には帰りがたい」との観念を有つてゐる[10]」とされるが、この概念は、以下に示すような、『記紀』に残された「黄泉戸喫」（『古事記』）や「飡泉之竈」（『日本書紀』）という古代神話から来ていると考えられる。

> 【古事記】「悔しき哉、速く来まさずて。吾は黄泉戸喫為つ。然れども愛しき我が那勢命、入り来坐せる事恐ければ、還り欲む

8 烏谷知子（2005.1）「万葉殯宮歌考―宮遷りの表現を中心に」『学苑・日本文学紀要　第 771 号』、12 頁。

9 上村繁樹（2016）「地域の埋もれた文化財「路傍の石仏」の保全と活用に関する考察―木更津の更申塔を例に―」『木更津工業高等専門学校紀要　第 49 号』、83-84 頁。

10 中村康隆（1936）「古代契約論の一片影―「黄泉戸喫」と婚姻の食事―」『民俗学研究　2 巻 2 号』、315 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

を、旦く黄泉神と相論はむ。我を莫視たまひそ。[11]」（下線は論者による追記、以下同じ）

【日本書紀】「吾夫君尊、何ぞ晩く来しつる、吾は已に飡泉之竈せり、然れども吾れまさに寝息まん、請ふな視ましそ、とまうしたまひき。[12]」

『古事記』でいう「黄泉」は黄泉国を、「戸」は竈の意をそれぞれ表すもので、「黄泉戸喫（ヨモツヘグヒ）」とは、「黄泉国の竈で煮炊きしたものを食することを言う」のである。また、『日本書紀』ではそれを「飡泉之竈」と記している。そして、ここで特に着目したいのは、「黄泉国の竈で煮炊きしたもの」、つまり「火の飯」という要素である。そもそも「黄泉戸喫」の神話では「火神生誕が二尊離別の原因として語られ」た上で「かやうな忌火の食物の思想がヨモツヘグヒの基礎」をなしているとされ、「従つて、此の黄泉の火の飯を食するものは死者の世界の親縁者丈で、一般の生者との関係を途絶せるものである」[13]という。

では、こうした点を踏まえ、ここでは、前述した「竈」と「火」という言葉を念頭に置きながら、以下の図 1 に示す絵コンテとそこに記された手書きの注記を確認したい。

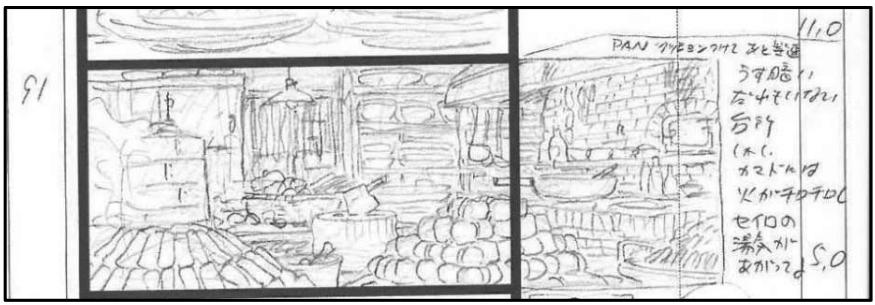


図 1：『千と千尋の神隠し』の一シーンの絵コンテ

[11] 次田潤（1924）『古事記新講』明治書院、56 頁。
[12] 黒板勝美（1987）『訓讀日本書紀　上巻』岩波書店、22 頁。
[13] 前掲中村康隆（1936）、327-328 頁。

臺灣人學術期刊資料庫

アニメにおけるこのシーンでは、カウンターの奥に「竈」と「火」がしっかりと描かれており、該当シーンの絵コンテにも{(うす暗いだれもいない台所　しかし、カマドには火がチロチロし　セイロの湯気があがってる)}（91 カット）という注記が付けられている。

そして、元来ある「古代日本に於る「火」の信仰の重要性、従つて家の神としての炉・竈 foyer の重要性[14]」を併せて考えると、両親が「湯バーバ」に豚にされたのは、まさに「ゆ：人間の来るところじゃない」「異界の竈で煮炊きしたもの」を、「ゆ：豚のようにくいちらして！当然の報い」（434～435 カット）が理由であると考えられるものであろう。

また、この湯屋の「釜の口」にいる「カマジイ」は、六本手足のキャラクター（以下の図 2 左）だが、こうした造形は、古い日本家屋の台所の周辺などでよく見られた〈竈馬〉という、後ろ足の長い同じく六本足の虫（同右）に似ている。つまり、「湯屋」の「釜の口」で登場する「カマジイ」のこうした造形も、〈竈馬〉ひいては「竈」に通じるもので、こうした一連の描写は「黄泉戸喫の竈の火[15]」のモチーフを暗示したものではないかと考えるのである。

[14] 前掲中村康隆（1936）、356 頁。なお、高島元洋（2009）は、柳田国男が提示した「火」「食物」「家」「産土思想」の理論を援用し、「家の神」としての「かまど神」をさらに次のように指摘している。「いわゆる「神道」とよばれる信仰」に基づき、「家の中心に囲炉裏がある。その周囲に、家の主が座る横座があり、またかか座・客座があった。囲炉裏の火を中心とする秩序があった。（中略）そこは荒神様（かまど神）が管理する領域であった。神が管理する「清い火」により食物が調理された。食事とは「共同飲食」であった」。高島元洋（2009）「神道における「食」」『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成 20 年度活動報告書学内教育事業篇』（お茶の水女子大学大学院人間文化創成学研究科）、310 頁。

[15] 烏谷知子（2007.1）「黄泉国訪問神話の構成」『学苑・日本文学紀要　第 795 号』、3 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫



図 2:「カマジイ」と竈馬

三、〈氏族制度〉〈共飲共食〉と「湯バーバ」

一方、異界の食べ物を一切口にしようとしない千尋は、日没とともに体が徐々に透け始めた。帰路を海に阻まれ途方に暮れる千尋に対し、ハクは、「口を開けて、これを早く。この世界のものを食べないとそなたは消えてしまう」(1179 カット)、「大丈夫、食べてもブタにはならない。噛んで飲みなさい。」(182 カット)と促し、一粒の「丸薬」(182 カット)を無理やりに飲ませた。千尋はその「丸薬」によって消えてしまうことを免れたものの、「兄役:人間はこまります」(481 カット)、「ヒトくさくてかなわんわ」(483 カット)と、そこの住民から嫌われる存在となる。これに対し、ハクは、そうした「人間くさい」性質も「ここ(論者注、湯屋)のものを三日も食べればニオイはきえよう」(484 カット)と説明する。つまり、これら一連のセリフから考えれば、この物語では、人間が異界のものを食べてはいけないという制約はなく、むしろ「食べないと」その姿が「消えてしま」い、さらに異界になじむためには「ここのものを三日も食べ」なければならない、とされているのである。

もっとも、最終的には千尋も異界の食べ物を口にしている。しかし、異界の食べ物を口にしたことで豚になった両親と相違し、千尋は、そのまま人間の姿で居続けることとなった。ここでは、こうした違いの理由を、湯屋の従業員たちが千を受け入れる以下のようなシーンを手掛かりに探ってみよう。

臺灣大學學術期刊資料庫

｛大蛙２人　父役と兄役（部長と課長とおもって下さい)｝
父役：いくら湯バーバさまのおっしゃりでも、それは、、、
兄役：人間はこまります
｛帳場、ヤジカエル、ナメクジ集まっている。心細いおもいで立っている｝
ハク：すでに契約されたのだ
父役：なんと、、、
一同：ザクザク
｛ザワつく敵意と嫌悪の中で健気にあいさつ｝
ちひろ：よろしくお願いします
女ィ：あたしらのとこへはよこさないどくれ
｛ちひろの後の女達特に声高にいう。他の者にまださわつきのこる。ちひろガク然｝
女ロ：ヒトくさくてかなわんわ
｛ハクはひややかにその女達へ｝
ハク：ここのものを三日も食べればニオイはきえよう。それが使い物にならなければ焼こうが煮ようがすきにするがイイ
｛ちひろ　ハッとハクをみる。ハクは本当に味方なのか、、、。後の者達ざわつく｝

（481-485 カット）

この場面から、従業員たちがしぶしぶながらも結局は千を受け入れたのは、「湯バーバさまのおっしゃり」というよりも、ハクの「すでに契約をされたのだ」という一言によるのであることが分かる。つまり結論からいうと、千尋と両親との運命の分かれ目は、「湯屋」の支配人である「湯バーバ」と「契約」を結んだか否かであったと考えられるのである。

また、千尋が｛天の階｝で「湯バーバ」と契約を交わす際、「湯バーバ」は「ぜいたくな名だね」といって、本名の「荻野千尋」から三文字を省き、「今からお前の名は千だ」（465 カット）と「湯屋」で

臺灣大學學術期刊資料庫

の呼び名を決めた。そして、こうした契約のシーンの後、「湯バーバは相手の名をうばって支配するんだ」(552 カット)、「名をうばわれると帰り道が判らなくなるんだよ」(554 カット)と、ハクが再び「湯屋」の「きまり」を説明した。

「黄泉の火の飯」を食する「黄泉戸喫」(「飡泉之竈」)の神話は、既に述べてきたとおりであるが、ここではさらに一歩進んで、それと深く関わっている〈氏族制度〉・〈共飲共食の儀礼[16]〉との接点を確認したい。

〈氏族制度〉における「氏族」とは、「直系傍系の血族関係より成れる大家族的共同生活団体たる戸の多数を包括する一の同族団体の名称[17]」で、「この氏の首長を氏ノ上」は、「絶対的支配権[18]」を持つ。そして、この氏族集団には、血縁関係にある「氏人」の他、「氏に付属して部の民」や「奴婢」もいるが、ここで特に着目したいのは、「豪族の私有のもの」である「部の民／部曲[19]」である。

彼らは「農耕や特殊な技術をもって氏全体に奉仕し、氏の経済的基盤をなした」存在であるが、こうした豪族の私有民は、たとえ氏族とは血縁関係を持たなくても、「その首長の氏に従属し、その氏名を使称してゐれば、長き間には、遂に同祖同族の観念を生じ[20]」るようになったとされる。そして、「氏族制度の社会に於ける経済単位は、このムラ—即ち部落共産体」でもあり、「契約成立を保障し又宣誓する共飲共食の古い儀礼の存したことを暗示する」という。つまり「か

16 「この黄泉戸喫の話も、国産み神話の一部であることが重要で、おそらく弥生ぐらいまでは、十分にさかのぼるものと思われる。こうした神話の存在は、共食によって共同意識が育まれる、という観念が、すでに古代日本に成立していたことを、明らかに物語っている。それゆえ古代から、共食を媒介とした誓約行為が存在していた、と考えてよいだろう。」原田信男(1997.3)「古代・中世における共食と身分」『国立歴史民族博物館研究報告第 71 集』、499 頁。なお、下線は本稿論者による追記である。

17 山本勝太郎(1928)「古代社会に於ける氏族制度と其の経済単位に就て」『三田学会雑誌』、139 頁。

18 前掲山本勝太郎、140 頁。

19 部曲は部民とも書き、大和時代(大化前代)の豪族の私有民であり、令制の家人でもある。奴婢とは異なり、一定の職業を持ち、だいたい村落を単位として豪族に仕え、租税を収め、徭役に従いその隷属する主家の名に「部」の字をつけて名字とした自営の「民」である。

20 前掲山本勝太郎(1928)、148 頁。下線は筆者による追記。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

やうにして、共飲共食の幾儀礼中には明白に契約の誓約とその拘束力との観念が窺へる[21]」のである。

では、以上のポイントを踏まえた上で、ここで改めて、「湯屋」の世界を見てみよう。まず、この物語でもっとも興味深いのは、「名前を奪うという行為は、呼び名を変えるということではなく、相手を完全に支配しようとする方法[22]」であるという「きまり」である。宮崎ら同作制作陣によるこうした設定は、前述した〈氏族制度〉の構造に酷似していると思われる。ただ、この物語における「湯屋」という「ムラ」の構成と、先に述べた古代〈氏族制度〉の仕組みと併せて考えてみれば、同作における独自の世界観が見て取れる。

古代〈氏族制度〉における「氏ノ上」はいわば、同作「湯屋（ムラ)」においては言うまでもなく、「相手の名をうばって支配する」「湯バーバ」である。また、「湯屋（ムラ)」には血族関係を有する氏人は見当たらないものの、「ムラ」という「経済単位」を支える「部の民／部曲」、すなわち、「カマジイ」「ハク」「カエル男」「ナメクジ女」といった労働者が数多く存在する。そして、「湯屋」におけるこれらの労働者もまた、「湯バーバ」と「契約」を結ぶ際に、本来の名が奪われ、「この世界」で生きていくために、「氏ノ上」である「湯バーバ」によって再命名されなければならない運命であった。

そして、外来者である「荻野千尋」もまた、「湯バーバ」と「契約」を結ぶことで「千」となり、さらに、そこの住民に嫌われる「人間くさい」性質から、「ここのものを三日も食べればニオイはきえ」てしまう運命をたどることとなる。言ってみれば、血縁関係を持たないこれらの労働者は、「その首長の氏に従属し、その氏名を使称し」、

---

[21] 前掲中村康隆（1936)、353 頁。なお、下線は本稿論者による追記。また、神話と共食との関連性について、中西進も次のように補足している。「記紀には、よく「共食者」という言葉が出てくるが（例えば雄略紀)、これは同じ食物を食べることによって、同じ土壌に従属し、連帯感を持つということの示唆である」中西進(1980.3)「古事記抄―黄泉国神話―」『成城国文学論集 12』、3 頁。

[22] 『千と千尋の神隠し』企画書〈一九九九年十一月八日〉より。映画パンフレット〈東宝二〇〇一年七月二十日発行〉に収録。ただし引用は、前掲宮崎駿（2008)、231 頁による。

臺灣大學學術期刊資料庫

「共飲共食」の「誓い[23]」を交わすことで「ゆや一同」(702 カット)になったと考えられるのである。

四、おわりに

本稿では、外国人にとって難解なものとされる、『千と千尋の神隠し』に内在する〈日本的な何か〉の内実が、神話の時代から伝わってきた〈黄泉戸喫(ヨモツヘグヒ)〉や〈共食制度〉、さらに〈氏族制度〉といった、古代日本の信仰や社会的な構造と深く関わっていることの一端を明らかにした。そして、それぞれの要素に関連する作中のセリフや象徴する登場人物を整理すると、以下のようなものとなる。

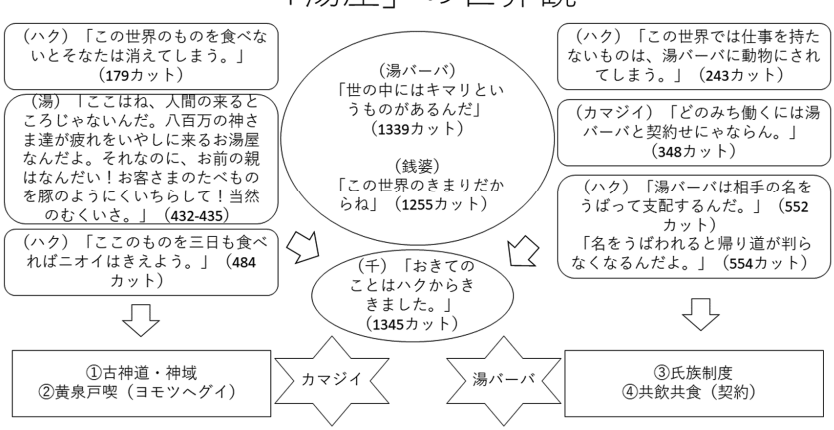


図 3:『千と千尋の神隠し』の世界観と日本の伝統的文化

なお、海外にも広く知られた同作であるが故、「『千と千尋の神隠し』を用いて日本文化を教える」といった教育実践例の報告はいく

[23] 「ここで働きたいんです!!」(453 カット)、「ハタラカセテクダサイ」(455 カット)と一点張りの千尋に、「湯バーバ」は当初、「なんであたしがお前をやとわなきゃならないんだい。みるからにクズで甘ったれで泣虫で、頭の悪い小娘に仕事なんかあるもんかね」ときっぱりと断った。だが、隣の部屋で暴れた坊を静めるため、狼狽した「湯バーバ」は、「つまらない誓いをたてちまったもんだよ 働きたい者には仕事をやるだなんて」(462 カット)と呟きつつ、嫌々ながらも契約書にサインさせた。

臺灣大學日本語文學系

つもみられる。それらの先行する教育実践の内容や対象としたテーマとして、「アニミズム」「ウチとソトの社会空間」「両義的曖昧性」「視点」「借用の形態」「お風呂・温泉」「神隠し」「不思議と思議」「未練の思想」といった九つの文化的事項が挙げられている[24]。ただ、アニメ作品に現れる数々のシーンを断片的に取り上げて紹介する手法は、いわば「非組織的・落穂拾い的な方法[25]」に留まり、「ステレオタイプ的な日本紹介[26]」に陥る懸念がある。そしてこうした懸念は、「クールジャパン戦略[27]」における指摘とも軌を一にするものである。すなわち、「外国人の多くは、「食」や「アニメ」などの具体的なコンテンツを「入り口」として日本に関心を抱」いたが、それだけでは「それらの背景にある、縄文から連綿と続く日本の歴史、伝統、文化、日本人の行動様式[28]」といった〈深み〉までは理解されない、という課題に通底するものである。

本稿では、物語の表層に散りばめられた「アニミズム」や「神隠し」といった要素を入口とし、日本神話を視座とすることで、「火の飯（竈／釜）」に基づく「黄泉戸喫」や、「共食信仰」を重んじる「氏族制度」といった、古代日本の〈深み〉にある構造を見出してきた。

---

24 牧野成一（2008）「日本語・日本文化教育とアニメ―『千と千尋の神隠し』の場合―」『外国語としての日本語教育―多角的視点に基づく試み』くろしお出版、66-70 頁。

25 藤岡信勝（1997）『自由主義史観とは何か：教科書が教えない歴史の見方』PHP 研究所

26 門脇薫（2013）「映像作品を利用した異文化理解のための日本語教育」『日本学刊　第 16 号』20 頁。

27 「クールジャパン（CJ）戦略」は、経済産業省が「2010 年頃からの取組」であり、「世界から「クール（かっこういい）」と捉える（その可能性のあるものを含む）日本の「魅力」」を海外に広げ、いわゆる「日本全体のブランド化戦略である」という。「CJ 戦略」は発足して以来幾度の修正を経て、2019 年に至っては、「日本ファンである外国人との協働を通じ、世界の目線を入れることで」、これまでの、「日本人が日本人目線でいいと思うものを世界に売り込もうとするプロダクトアウトの活動」から以下のような目標を目指すようになる。①「世界の目線を起点としたマーケットイン」、②「外国人との協働」や「関係者のネットワーク化による連携強化」、③「日本の様々な魅力に共感し愛情を抱く日本ファン（筆者注、外国人有識者も含む）を国内外において増やしていくこと」、などである。
前掲、日本内閣府知的財産戦略本部（2019.9）、1-29 頁。

28 日本内閣府知的財産戦略本部（2019.9）「クールジャパン戦略」、公式サイド PDF 公開版、17 頁。最終閲覧日：2024.10。
https://www.cao.go.jp/cool_japan/about/pdf/190903_cjstrategy.pdf

臺灣人學者的期刊資料庫

日本古来の要素が幾重にも織り込まれた『千と千尋の神隠し』は、「縄文から連綿と続く日本の歴史、伝統、文化」に触れる機会を与えうる作品として再評価されるべきであろう。本稿ではその物語構造の理論的基盤を提示するにとどめ、異文化教育の素材として活用する具体的なコースデザインの可能性については、今後の課題として別稿に譲る。

【付記】本稿は、教育部教学実践研究計画（PHA1080023）の研究成果の一部であり、2023 年臺大日本語文創新国際学術研討會で口頭発表したものを基に大幅に改稿したものである。口頭発表および論文審査の際に基調なご意見をくださった先生方に深く御礼を申し上げる。

【テクスト】

宮崎駿（2022.2、9 刷発行）『スタジオジブリ絵コンテ全集 13　千と千尋の神隠し』徳間書店

【参考文献】

英文資料

Wright, Lucy. “Forest Spirits, Giant Insects and World Trees: THe Nature Vision of Hayao Miyazaki.” *Journal of Religion and Popular Culture 10*(2005): no. pag. Print.

Napier, Susan J. “Matter out of Place: Carnival, Containment, and Cultural Recovery in Miyazaki’s Spirited Away.” Journal of Japanese Studies 32.2(2006): 287-310. Print.

Denison, Rayna. “The Global Markets for Anime: Miyazaki Hayao’s Spirted Away.” Japanese Cinema: Texts and Contexts. Eds. Phillips, Alastair and Julian Stringer. London: Routledge(2007). 308-321. Print.

臺灣大學學術期刊資料庫

Yoshioka, Shiro. “Heart of Japaneseness: History and Nostalgia in Hayao Miyazaki’s Spirited Away.” Japanese Visual Culture: Explorations in the World of Manga and Anime. Ed. MacWilliams, Mark W. Armonk: M. E. Sharpe(2008). 56-73. Print.

Foster, Michael Dylan. “Yokai Culture.” in *Pandemonium and Parade*. University of California Pres,(2008). 204-206. Print.

Thomas, Jolyon Baraka. “Enteraining Religious Ideas.” in *Drawing on Tradion: Manga, Anime, And Religion on Contemporary Japan*. University of Hawaii Press,(2012). 103-118. Print.

日文資料

次田潤（1924）『古事記新講』明治書院

山本勝太郎（1928）「古代社会に於ける氏族制度と其の経済単位に就て」『三田学会雑誌』

中村康隆（1936）「古代契約論の一片影―「黄泉戸喫」と婚姻の食事―」『民俗学研究　2 巻 2 号』

中西進（1980）「古事記抄―黄泉国神話―」『成城国文学論集 12』

黒板勝美（1987）『訓讀日本書紀　上巻』岩波書店

藤岡信勝（1997）『自由主義史観とは何か：教科書が教えない歴史の見方』PHP 研究所

原田信男（1997.3）「古代・中世における共食と身分」『国立歴史民族博物館研究報告第 71 集』

烏谷知子（2005.1）「万葉殯宮歌考―宮遷りの表現を中心に―」『学苑・日本文学紀要　第 771 号』

烏谷知子（2007.1）「黄泉国訪問神話の構成」『学苑・日本文学紀要第 795 号』

牧野成一（2008）「日本語・日本文化教育とアニメ―『千と千尋の神隠し』の場合―」『外国語としての日本語教育―多角的視点に基づく試み』くろしお出版

宮崎駿（2008）『折り返し点 1997～2008』筑摩書房

臺灣大學學術期刊資料庫

高島元洋（2009）「神道における「食」」『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成 20 年度活動報告書学内教育事業篇』（お茶の水女子大学大学院人間文化創成学研究科）

門脇薫（2013）「映像作品を利用した異文化理解のための日本語教育」『日本学刊　第 16 号』

上村繁樹（2016）「地域の埋もれた文化財「路傍の石仏」の保全と活用に関する考察―木更津の更申塔を例に―」『木更津工業高等専門学校紀要　第 49 号』

田中美保子（2018）「宮崎駿『千と千尋の神隠し』のアメリカにおける受容―日本の神々・妖怪たち」『東京女子大学比較文化研究所紀要 79』

臺灣大學學術期刊資料庫